

小城鍋島文庫蔵書解題稿(一)

白石 良夫

小城鍋島文庫研究会では、科学研究費基盤研究「地域の文化財群としての小城鍋島藩蔵書の研究―その全貌の解明と具体例の分析」(研究代表者||中尾友香梨、課題番号15K02251)を得て、平成二十七年八月に第一回の文庫調査を実施した。文庫調査は年二回おこない、できるかぎりの機会にその報告として、科研費分担者・協力者および連携研究者による書誌解題を公開してゆきたい。本稿はその第一回である。

解題は当文庫の現況の記述を主旨とし、文庫蔵書固有の情報を伝えることに重きをおいた。

俗説弁 0009 刊 井沢蟠竜著

半紙本、六巻六冊(巻七欠)。全冊表紙原題簽なく、後補題簽に墨筆「本朝俗説弁」(第三冊のみ打ち付け書きで「俗説弁」)。内題・尾題・序題・目録題「本朝俗説弁」(巻四尾題のみ「俗説弁」)。巻一内題下「蟠竜子節長秀輯録」。見返に、

蟠竜子先生著

俗説弁

京上書鋪柳枝軒蔵版

とある。序文末「宝永四丁亥歳 竹塙散人書」(竹塙散人は姓佐藤)。蔵書印「叢桂館蔵」。

考証随筆。世に行われて婦女童蒙を感わす俗説について、和漢の文献を援用しながら弁駁する。『統俗説弁』(宝永五年)『新俗説弁』(宝永七年)がおなじ柳枝軒から続刊され、この三書を改訂増補再編集し、正

徳五年に『広益俗説弁』二十巻として刊行された。

なお、本書初刷の序文末は「宝永三丙戌歳林鐘穀旦/左筈之有甫識」。当文庫本はこの部分のみを埋木改刻した後刷本。筈・之有甫は竹塙の諱と字。

〔参考〕白石良夫「井沢蟠竜寛書」(『江戸時代学芸史論考』平成十二年)

駿台雑話 0010 刊 室鳩巢著

大本、五巻五冊。表紙原題簽剥落。内題・目録題・尾題・柱題いずれも「駿台雑話」。寛延庚午十一月冬至日 東都直学士藤原明遠(中村蘭林)謹識」という署名の漢文序に、「駿台雑話五巻廻ち鳩巢室先生の著す所なり」、「書誌崇文堂、諸を木に上して以て不朽に伝へんことを請ふ」とある。聴講の門弟に擬した和文序末に「享保季のとし九月中旬、鳩巢の翁、駿台の草の菴にして筆をとる」とある。蔵書印なし。奥付、

寛延庚午十一月

東都書肆崇文堂

日本橋南三丁目

前川六左衛門

駿河台の自宅に集う門弟たちに語って聴かせるといふ設定で書かれた随筆集。朱子学的教訓を色濃く見せる。

雲根志 0012 刊 木内石亭著

半紙本、前編五巻六冊(巻二を分冊)、後編四巻六冊(巻一・三をそれ

それ分冊)。原題簽は「雲根志」(前編は「湖上石話」の角書あり)。内題・序題・目録題・尾題・柱題いずれも「雲根志」。内題下「江州山田浦木内小繁重暁(号石亭)著述」。自序文末「明和壬辰(安永元年初冬中瀬/淡海石亭主人木内重暁撰」、木村兼葭堂序文末「安永二とせ三月浪花兼葭堂主人記」。蔵書印なし。

諸書によれば後編を安永八年刊とするが、当文庫本には、前編・後編とも左のごとき予告付き奥付(同一版木)が付されている。「後編嗣出」の文字から、後刷のさいに前編用の奥付を使ったのであろう。

木内小繁先生著述
雲根志 後編統編拾遺 嗣出
安永二年癸巳九月発行

京都 斎藤庄兵衛
書林 江戸 前川六左衛門
心齋橋通南久宝寺町
大坂 高橋平助梓

日本全土から蒐集した奇石を分類し解説を加える。精密な標本画とあいまって、甌石趣味の域を超えて、鉱物学・化学・考古学等の分野の学術的資料としても貴重な研究書。

雲根志三編 00-13 刊 木内石亭著

半紙本、六卷六冊。表紙原題簽「雲根志三編」(角書「諸国石話」)。内題・序題・目録題・尾題・柱題いずれも「雲根志三編」とあり。内題下「江州山田浦木内小繁重暁著述」。見返に「江州山田浦木内小繁先生著/諸国石話雲根志三編」とあつて、さらに版元の左の広告文、

此篇は 諸州に名ある玉石 郷人の言伝ふる所を拾ひ 再諸家珍藏の奇観 及び小繁先生年来採収る砂石等 ことごとく注釈し

松村九兵衛
大野木市兵衛

蔵書印「長崎県小城中学校印」。

和漢三才図会 00-02 写

半紙本、一冊。表紙題簽「和漢三才図会」、内題「和漢三才図会」。巻八〇の地部肥前国の部分から佐嘉・小城・松浦を抄写。蔵書印「叢桂館蔵」。

和漢三才図会抜書 00-03 写

半紙本、一冊。表紙題簽「和漢三才図会 桜名寄」、また打ち付け書きで「和漢三才図会 抜書/桜名寄」とあり。本文第一行「桜名花数品」。

拾芥抄 00-22 刊

大本。もと上中下三巻、各巻本末二冊仕立ての六冊であつたと思われるが、そのうち上巻末・中巻本末の三冊のみ存。内題・尾題とも「拾芥抄」。表紙原題簽剥落、打ち付け書きで内題と同じ書名を記す。首尾を欠くため、序跋等の有無、および出版事項等不明。慶長古活字版の存在が知られるが、当文庫本は整版である。蔵書印「荻府学校」。鎌倉期成立の類書(漢文)。伝存諸本から編者は明らかにしがたいが、洞院公賢編集説が有力。

中臣祓風水草 01-02 写 山崎闇齋著

大本、三巻八冊。表紙原題簽「風水草」、内題「風水草」、尾題「中臣風水草」、柱部分「風水草」(一部の丁に「垂加草」の文字あり)。巻一内題下「垂加翁山崎嘉敬義(闇齋)」。蔵書印なし。

和漢の書を徴として 弄石家の参考に備ふ 浪華書林 興文堂蔵版

序文末「享和改元辛酉年四月 宇治五十槻(荒木田久老)」、跋文末「享和元年重光口臯月朔 浪華藤井元肅(号樗亭)識」。奥付に、
享和元年辛酉五月
心齋橋通南久宝寺町

大坂書林 高橋平助梓

とある。

安政見聞誌 00-15 刊

大本、三巻三冊。表紙原題簽「安政見聞誌」(角書「万歳楽」)。内題「安政見聞誌」。無署名の序文あり。奥付なし。色刷り挿絵豊富。画者として「一勇齋国芳(歌川国芳)」「一登齋芳綱(歌川芳綱)」「一筆齋英寿(景齋英寿)」「一鶯齋国周(豊原国周)」等の名が見える。蔵書印なし。

安政大地震のルポルタージュ。江戸市中の被害状況や情報・流言等を努めて忠実に取材する。著者名を明記しないが、宮武外骨によれば、仮名垣魯文が関与しているという(『筆禍史』)。

和漢三才図会 00-16 刊

大本、九十五巻六十九冊(欠巻多し)。表紙原題簽「倭漢三才図会」、内題・目録題・柱題「和漢三才図会」。内題下「攝陽城医法橋寺島良安尚順編」。奥付、

岡田三郎右衛門
鳥飼市兵衛
書肆 渋川清右衛門

該書は松岡玄達書写。籠字による元奥書あり。

這風水草三冊者伝授于玉木正英也

正徳五年二月廿二日従一位(花押)

右垂加霊社中臣風水草十巻者 予正親町従一位公通卿所直授也
依雅丈積年崇信斯道且夕研究不已 先既口授神籬磐境之奥秘了
今又依年来之懇請併而附属之畢 因書歲月云爾

享保六年辛丑二月二十二日 埴鈴雅丈

埴鈴は松岡玄達(成章)の別号。玉木正英(葦斎)↓正親町公通↓松岡玄達と伝授された。さらに玄達から下河士行なる人物に伝授する旨の墨筆奥書、

此書予感其尊信之厚先既伝以平日所粗聞神籬岩坂之伝 今併授此
篇子勉而読之 非其人勿猥伝云爾

原本三巻以簡帙重大後分而為八或十 今復旧云

七十九老亮

延享丙寅(三年)初夏 平安松岡成章謹題「埴鈴翁」

(印) 下河士行雅丈

延喜式巻八所収の「大祓詞」の註釈。垂加神道の奥秘である三種神宝・神籬磐境の伝が詳しく展開される。

中臣祓風水草 01-17 写 山崎闇齋著

大本、三巻五冊(巻三の一部欠)。本文は前項と字配り・行移りが一致する。書写事情は奥書部分を欠くため不明。蔵書印なし。

神社附 01-03 写

大本、一冊。表紙打ち付け書き「神社附」。扉に「神社附/陽印」とあ

り。奥書は次のごとし。

此一冊者吉田神竜院兼庵以自筆本写之畢

右秘奥下部兼起相伝也 可秘々々

明曆貳乙申年仲春朔写之畢「鍋島伊賀守藤原直能」(印)

明曆二年の干支は丙申。吉田神竜院は唯一神道の創始者吉田兼俱。卜部兼起(明曆三年没)は吉田神道の神祇管領長上。

日本全土の神社の名鑑。由来・鎮座地・祭神・年代記等を記述。

宗統録 0104 刊 竜溪性潜著

大本、五卷五冊。表紙原題簽「宗統録」(角書「御版」)、目錄題「宗統録」、内題・尾題「特賜大宗正統禪師宗統録」、柱題「御版 大宗正統禪師宗統録」。大宗正統禪師は竜溪性潜の号。扉一面に「御版」とある。竜溪性潜の肖像画、同人の贊(文末に「如常老人自題」、如常老人も竜溪性潜の号)あり。内題下に「門弟子祖激性安編録」。「太政法皇(後水尾院)御製」と題して「寛文九年九月廿日」の年記をもつ序文に次のごとくある。

師実に其の正統を得る者なり。特に大宗正統禪師と賜ひ、請益録を改めて宗統録と作し、聊か有功を賞して以て万古に伝ふ。(原漢文)

文中の「請益録」は、竜溪性潜が後水尾院に私的に語った語録集。当文庫本は貝原書院(京都の仏書専門書肆)による明治期の後刷。初刷の刊記、

京師押小路通書肆

西村喜兵衛藏板

をのこす。

続神仙戯術 0115 刊 馬場信武著

大坂書林 秋田屋太郎右衛門

本町三丁目

東都書林 和泉屋善兵衛

序跋整版、本文木活字版。蔵書印「荻亭蔵書」。

問答形式で大学の諸説について論議する。著者の明示はないが、答に「焜按云々」の語句あり。焜は古賀侗庵の名。精里の三男にして昌平覺教授。また、序文に「(古賀精里) 嗣侗庵先生をして之(家学)を紹述せしむ。先生博覽精究、著書以て朱子の未だ足らざる所を補ふ」(原漢文)と言って侗庵の学問を語る。序文筆者の小竹は精里門弟、跋文筆者の義方は伝未詳。

大学問答 0128 写 古賀侗庵著

半紙本、二卷二冊(巻一・三存)。表紙原題簽なし(打ち付け書き「大学問答」)。内題・序題「大学問答」。序文末「文政丁亥藤月浪華筱崎彌撰」。最終冊を欠くため、書写事情等不明。蔵書印「荻府学校」。

中庸解 0130 刊 荻生徂徠著

大本、二冊。内題・尾題・柱題「中庸解」。表紙原題簽なし、打ち付け書きで内題を写す。内題下「日本物茂卿(荻生徂徠)著」。奥付、

宝曆三年癸酉二月吉辰

東都書林松本新六/藤木久市合刻

蔵書印「叢桂館蔵」「荻府学校」。諸版本に「物夫子著述目錄」(服部南郭撰)を付すというが、当文庫本にはなし。

明和九年歌合集 0956-19 写

横本、一冊。内題「続神仙戯術」。表紙原題簽はなく、打ち付け書きで内題を写す。内題下に「馬場信武選」。奥付、

元禄十二歳

地天泰月吉日

花雉書林

教来寺開板

奇術書『神仙戯術』は、陳眉公(中国明時代の人)の原作、馬場信武の翻訳で元禄九年に京都菱屋勘兵衛から出版された。『続神仙戯術』はその続編。奇術や占いのことを記す。伝本稀少。

指月夜話 0119 写

大本、四卷四冊(巻二・六存)。表紙題簽なし、打ち付け書きで「南洞録」とあり(この書名不審)。内題・目錄題「指月夜話」。全七冊だったと思われるが、首尾を欠くため書写事情等不明。蔵書印「荻府学校」。当文庫本に著者情報はないが、小城出身の黄檗僧、潮音道海の著作とされる。漢文隨筆集。禅宗だけでなく、神道や仏教・儒教・政治論など幅広い話題を評論する。

大学問答 0129 刊 古賀侗庵著

大本、四卷四冊。表紙原題簽「大学問答」。内題・尾題・序題・柱題いずれも「大学問答」。序文末「文政丁亥(十年) 藤月浪華筱崎彌(小竹)撰」。跋文末「己酉(嘉永二年) 九月口増識津山義方敬書」。奥付、

嘉永二年己酉暮秋刻成

愛月堂藏版

心齋橋通安堂寺町

表紙なし。書名は仮称。明和九年に催された、以下の十三度の歌合記録を一冊に合綴。書式・書型は統一されず。催者は鍋島直嵩であろう。蔵書印「曲肘亭」(直嵩使用印)。

第一回 十二番、開催日不明、詠者八名。判者を明記しないが、直嵩歌の判詞中に「賤しき丸が歌にて侍れば」とある。

第二回 十八番、扉「辰正月廿四日夜/御歌合」、判者不明、詠者二名。

第三回 二十一番、扉「歌合/明和九年辰三月廿六日」、末尾「判者中原玄廓」、詠者十四名、作者附あり。

第四回 二十四番、扉「明和九年辰卯月御歌合」、末尾「判者直嵩君暮山子規 卯花留客/忍涙恋 昌許」(判は直嵩と菅原昌許で分担)、詠者十五名。

第五回 七番、扉「明和九五月御歌合」「玄庭判」、詠者十三名。

第六回 七番、同日開催か、判者不明、詠者十四名。

第七回 七番、同日開催か、詠者十二名。判者を明示しないが、松隈歌の判詞中に「愚老がふつゝかな心にて云々」とある。

第八回 五番、扉「六月御会」、判者不明、詠者十名。

第九回 五番、同日開催か、判者不明、詠者十名。

第十回 五番、同日開催か、判者不明、詠者九名。

第十一回 二十一番、扉「辰八月御歌合」、詠者十五名。判者を明記しないが、松隈(衍翁)歌の判詞中に「愚老が作なり」とある。

第十二回 四十六番、扉「辰九月御歌合」、詠者二十二名。判者を明記しないが、直嵩歌の判詞中に「予が歌」「愚詠」「予がほれ歌」などとある。

第十三回 十四番、扉「安永元年辰十二月御歌合」、判者不明、詠者四名。

参加者は、鍋島直嵩・同直愈・静明院（直嵩・直愈生母）・久菊様（直嵩の異母姉）・熊菊様（直嵩同腹の妹）のほか、奥向きの女性や藩士と思われる人物。直嵩はすべての歌合に参加する。

〔参考〕白石良夫「鍋島直嵩主催の歌合」（柳川文化資料集成月報、平成二十八年刊行予定）

十帖源氏 091-09 刊 野々口立圃著

大本、十卷十冊。全冊、原題簽剥落。その跡に打ち付け書きで「十帖源氏」（第一冊のみ「源氏物語」）。蔵書印「藤」（直能使用印）「荻府学校」。

版本内部に書名・著者名の情報はない。奥付なし。挿絵多数（立圃自画という）。本文も立圃自筆版下による。『十帖源氏』は四種の版本の伝存が確認されていて、当文庫の該書は初版本のうちの無跋本であるが、その箇所（第十冊最終丁ウラ）に立圃肉筆の次の文が付される、注目すべき本である。

此一部、年来心にしめて見れ共くは木のことはりにも違はず、まして齢かたぶき、たそがれのそらめあやしき返す手もたゆし。さりとて、いたづらにさしをき侍らんもほるなきわざなり。所々書ぬき侍らばめやすからんと、筆のしりくはふるまもなく、あやまるふしをもちへりみず、よしある所々に絵をかきそへ、我身ひとつのなぐさめぐさとす。たゞわらはべのひいな遊びに似たり。老て二たび児に成たるといふにや。 立圃（花押）

ほかの三種の版本に刻される跋文は、これをそのまま流用したものの。本文には夥しい墨と朱の書入れがなされているが、うち墨筆のそれは立圃自筆と目される。朱筆は鍋島直能によるものか。詳細は左記参考文献の稿に譲る。

〔参考〕「小城鍋島文庫蔵『十帖源氏』翻刻稿（一）」（『佐賀大学文化教育学部研究論文集』十九卷一号、平成二十七年八月）

十帖源氏 091-9 刊 野々口立圃著

大本、十卷十冊。原題簽「十帖源氏」。前項の本のかなり忠実な覆刻再版本である。前述四種版本のうち、跋文を版刻しその末に、

万治四年卯月吉辰 立圃

とある本。前項書の書入れ（墨・朱とも）を転写する。

叢桂館御詠 0954-23 写

三冊。叢桂館は鍋島直嵩の号。蔵書印「曲肘亭」。

第一冊、表紙後装か、題簽なし。打ち付け書き「叢桂館御詠歌」。扉に「御詠歌 春夏秋冬恋神祇釈教雑」とある。

第二冊、二種の後装表紙、一に打ち付け書き「叢桂館御詠」、二におなじく打ち付け書き「叢桂館御詠歌」とあり。

第三冊、表紙後装か、題簽に「御詠歌」とあって、その右肩表紙に「叢桂館」とあり。扉に、

己丑春ヨリ

御詠歌

とある。「己丑」は明和六年（直嵩十七才）。歌数約三千首。大半が題詠歌であるが、冷泉為村逝去に臨んで詠んだ歌、直嵩の小城での歌の師が中原玄郭なる人物であることを知る記事などがある。

（本学地域学歴史文化研究センター特命教授）